

アグファとアンスコ

アンスコ(AnSCO)の本業はカメラ製造であった。共同グループを形成したアグファ(Agfa)は感光材料全般とフィルム消費拡大のためにカメラも製造する企業で、アメリカのコダックに匹敵するものであった。コダックはドイツにコダックA.G.を持ち、アグファもアンスコというグループ会社を米国に持ち、コダックとアグファは互いに対抗する写真産業であった。

アンスコは1842年創業のダゲレオタイプのカメラを製造していたアンソニー(Anthony)社(米国)に遡り、アンソニーは1901年同じく大型カメラを製造していたスコビル(Scovill)社と合併、1907年に社名をアンスコと変更した。

アグファは1867年アニリン製造会社(Aktiengesellschaft für Anilinfabrikation; Agfa)としてドイツに設立、感光材料全般を製造していたが、1925年にミュンヘンのカメラ製造会社リーチェル(A. H. Rietzschel GmbH)社を買収しカメラ製造部門とした。1928年アグファの米国法人とアンスコが合併してアグファ-アンスコ(米国企業)が設立された。この会社は第二次大戦中に敵性資産として米国政府により解体された。戦後アグファとの関係は再開され、アンスコは米国におけるアグファの米国部門としての関係を維持することとなった。1964年にベルギーの感光材料メーカー、ゲバルト(Gevaert)社と合併してアグファ・ゲバルトとなった。

時代の先端技術を行くアグファとアンスコ

歴史的に見てきたようにアンスコとアグファのカメラの歴史は古くその時代に合ったカメラ技術革新の一角を担っている。その好例としてあげられるのが、アンスコ メモ(1927年)である。35mm映画フィルムを使って映画のこまの画面すなわち現在で言うハーフ判のカメラを製造した(写真1)。時代はライカA型の時代である。当時のライカやコンタックスは専用マガジンに生フィルムを巻き込んで使用しており、パトローネ入りのフィルムが発売される1934年までは大変不便であった。この不便を解消したのがアンスコメモのカセットである。巻軸がないので生フィルムをフィルム出入の隙間から押し込んでいくだけで装填でき、撮影終了後の巻き戻しも不要である。固定焦点ながらシャッター4速、F6.3のレンズ付、ボディは軽量な木製で当時としては中級カメラであった。カセットフィルム1個で50枚の写真が撮れるということで名称は「メモ」。

このアンスコメモ・カセットフィルムは後にアグファでカラートシステム・カセットとして使用され、戦後はラビッドシステム・カセットフィルム(感度接点付、コダックインスタマチックに対応)に発展し富士フィルムからも一時発売されていた。アグファは戦後になるとブローニーフィルム6×6判蛇腹カメラながらオートマチック66(1956年)でセレン露出計と絞りを連動するAE化を実現し先端技術を誇示した。戦前1938年にコダックが発売したスーパーコダックSix-20に対抗するものである。

時代は新しいが、オリンパスXAの翌年発売のアグファコンパクト(1981年)はオリンパスと同様のケースレスカメラの走りであるが、内蔵された電動メカニズムには驚くべき技術が盛り込まれている(写真2)。電動自動フィルム巻き上げと巻戻し、レンズの自動繰り出しと自動収納、レンズカバーの自動開閉、自動露出などなどその後の日本のオートフォーカスカメラに用いられた自動機構の先駆けとなる

ものであった。この様に時代の節目にアグファグループはその時代の先端的技術を表す製品を開発してきている。しかし、その技術を利用したカメラを継続的に発売することはなかった。

初期の蛇腹ロールフィルムカメラ

アンスコはコダックより古く前身のアンソニー社時代に1841年からカメラ材料の仕事を始め、1870年代にはすでに木製蛇腹カメラの製造が記録されている。コダックのカメラ製造は1889年からである。アンスコ ヴェストポケット No.2 (1916年)は、金属ボディ、ヘリコイド式焦点合わせなど、当時のアメリカ製としてはかなり高級機である(写真3)。

アンスコの金属製シャッター付きの蛇腹カメラはアンスコ フォールディングカメラの名称で1900年初頭から発売され、金属製ボディとした蛇腹カメラは1910年台後半から姿を見せている。他方アグファ製の蛇腹カメラはリーチェルを吸収した1926年以降になる。

次のアグファ-アンスコ プレナックス PD16 (c1935年)はアグファ-アンスコ製だが、コダックの616(1932年発売)と同じサイズの(63×108mm)フィルムを使用するごく初歩的なカメラで明らかにアメリカにおけるフィルム大量消費を狙った大衆カメラである(写真4)。コダックは616フィルム使用のジフィー(Jiffy)コダック Six-16を1933年に発売している。

アメリカ発とドイツ発の二眼レフ

アグファとアンスコの技術で生まれた二眼レフには、アメリカで製造された6×6判二眼レフとアグファが発売した35mm判二眼レフがある。アンスコオートマチックレフレックス F3.5(1947年)は戦後2年目の製造だが、明らかにドイツ製二眼レフ特にローライ二眼レフが市場で払底したのを埋める代替品として



写真1 アンスコ・メモとアンスコ・メモ カセット
AnSCO Memo and AnSCO Memo Cassette



写真2 アグファ コンパクト
Agfa Compact



写真3 アンスコ ヴェストポケット No.2
AnSCO Vest Pocket No. 2



写真4 アグファ-アンスコ プレナックス PD16
Agfa-AnSCO Plenax PD16



写真5 アンスコ オートマチック レフレックス
Anso Automatic Reflex

設計されたことが伺える(写真5)。クランク巻き上げ、絞りとシャッターは上から数字を見て調節ができ、後期にはフィルム巻上げとシャッターチャージを連動させるなど当時のプロの要求に適うスペックでありピント合わせも左の回転ノブに加えて両側に繰り出しリングをつけるなどなかなか多能である。ローライに届かなかったのは1枚目から自動巻止めとなる完全自動巻止め機構がなかったことであつた。1950年代に価格が下落姿を消した。ローライの輸入再開と日本製カメラに押されたのであろう。しかしながらアメリカ製にしてはサイズもドイツカメラ並みで、精密機械を思わせる作りであるのは戦前のアグファとの協業で培われたドイツ技術のDNAの影響を感じさせる。

コダックも1946年に二眼レフ コダック レフレックスを発売したがレンズとシャッターはまずまずながら機構的には簡単なもので、アンスコの二眼レフには比肩すべくもない。

すでに35mmレンズシャッターカメラに特化していたアグファは一眼レフ、カラーフレックスを1958年に発表していたが、機構的に簡単な二眼レフ フレキシレッテ (1960年)を発売した(写真6)。二眼レンズとシャッターを大型のヘリコイドに収めてしまうという奇想天外の設計であるが可愛らしい外観デザインとドイツ



写真7 スーパーイゾレッテ(Agfa Super Isolette)
=スーパースピーデックス(Anso Super Speedex)

的精密機械の感触を兼ね備えたアグファの名機のひとつである。ちなみにアグファはチノンに製造させた一眼レフ以外にはフォーカルプランカメラには手を出さず最後までレンズシャッターカメラに終始した。35mmの二眼レフはツアイスのコンタフレックス、アメリカ製のボルシー、日本製ではサモカがあるが、いずれも類似点がまったくない独自のデザインであるのがおもしろい。フレキシレッテにペンタプリズムを搭載したオプティマ レフレックスも続いて発売されている。

ブローニー判フィルム近代蛇腹カメラ

アグファとアンスコはフィルム販売と合わせてカメラの大量販売を狙っていたから戦前はブローニーフィルム用のカメラを多数生産していた。戦後も35mmカメラ全盛時代を迎えるまではブローニー判カメラの生産は続いていた。アグファで生産したカメラはアンスコルートで6×6判と6×9判を中心に販売されていたが、アグファとしてはイゾレッテの名称で、アンスコではスピーデックスの名称で販売していた。距離計連動機はスーパーイゾレッテ(アグファ、以下AG)=スーパースピーデックス(アンスコ、以下AS)(1954年)で、ヘリコイド式の高級カメラである(写真7)。このカメラの機構をそっくり頂戴したのがソ連製イスクラである。イゾレッテにセレン露出計を搭載したのが前述のオートマチック66(1956)である。コダックも6×9判のメダリストや6×6判のシェブロンなどの高級機を発売したが両者ともにアメリカ的な重厚設計でアグファアンスコの6×



写真8 イゾレッテⅢ(Agfa Isolette III)=スピーデックススペシャル R (Anso Speedex special R)

6判カメラの軽快さは全く見られない。アグファの中級機としては単独距離計搭載のイゾレッテ(AG)=スピーデックススペシャル(AS)が6×6判と6×9判で発売されている。6×6判はイゾレッテⅢ(AG)=スピーデックススペシャル R(AS)(1951年)である(写真8)。

一つ気になったのは高級機ではゾリナー75mm搭載なのにこの機種にはアポター85mmを搭載したことである。85mmにしたのは3枚玉での6×6判の周辺の画質劣化を防ぐ意味があつたと思われるが、後述のように同じ6×6判用アポターには75mm F4.5のレンズもあり不思議である。

初級中級機としてはシンプルな蛇腹機が6×6判と6×9判で発売されたが国内はイゾレッテ(Isolette)、輸出はヴェンチュラ(Ventura)名であつた(写真9)。このカメラのレンズはアポター75mm F4.5で上述の単独距離計搭載の85mmレンズではない。アグファのブローニー判蛇腹カメラは1960年を以て販売を終了しているようだ。戦前のブローニー判カメラは、コダック同様にボックスカメラが多機種発売された。写真10に示すのはアメリカのアンスコで発売された616フィルム用のクリッパーカメラ(1938年)である。ブリキの四角筒を伸べて撮影状態にする。Bと単速シャッターで絞りもないまことに簡単な入門機である。

35mmカメラ

35mmカメラはシネサイズのアンスコメモが最初だが、アンスコメモに始まるアンスコメモ・カセットはカラートシステム・カセットとして、そ



写真6 フレキシレッテ
Agfa Flexilette

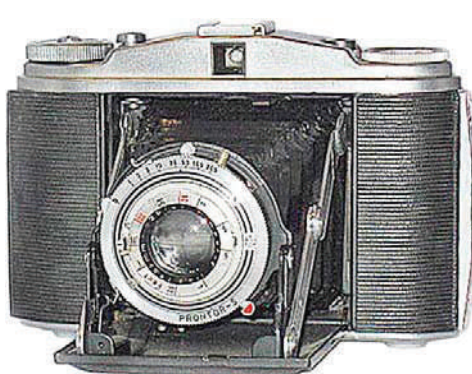


写真9 イゾレッテⅡ(Agfa Isolette II)=ヴェンチュラデラックス66(Export Ver. Ventura Deluxe 66)



写真10 クリッパー PD16
Clipper PD16



写真11 カラート 36(Agfa Karat 36) = カロマト(Ansco Karomat)



写真12 スーパーゾリネッテ Super Solinette



写真13 スーパージレット(Agfa Super Silette) = スーパーメマー-LSV(Ansco Super Memar LSV)



写真14 スーパージレット(Agfa Super Silette) = スーパーメマー(Ansco Super Memar) アポター付



写真15 ジレット(Agfa Silette) = メマー(Ansco Memar)

れを利用するカメラが多種類製造された。戦後しばらくはカラートシステム・カセット専用機のみであったが、その後これらのカメラは中止され普通のパトローネ入りのフルサイズ35mmカメラの時代に入った。しかしコダックからインスタマチックカメラが発売されるとラピッドシステム・カセットとして復活し専用カメラも発売されたが、高級機はパトローネ用のカメラであった。高級機はカラート36(AG)=カロマト(AS)(1952年、写真11)である。カラートシリーズは1950年モデルまで数モデル

が製造されたが以後は外観設計を変更してゾリネッテ35シリーズとなる。初期モデルはカラートを踏襲して蛇腹型ゾリネッテになるが、写真12はスーパーゾリネッテでヘリコイド式連動距離計の高級機。ゾリネッテシリーズは1953年に固定鏡胴の35mmカメラにモデルチェンジされジレットシリーズとなった。ゾリネッテシリーズではF2.8ゾリナーが最大口径だったが、1958年のスーパージレット(AG)=スーパーメマー-LSV(AS)でアグファ製の大口徑F2ゾラゴンレンズが搭載された(写真13)。

次のスーパージレット(AG)=スーパーメマー(AS)(1955年)は距離計連動ながら前玉回転式アポターレンズの廉価版である(写真14)。ジレット(AG)=メマー(AS)(1954年)は距離計もない堅牢でシンプルな入門機である(写真15)。

距離計連動型のジレットシリーズ最終機はレンズシャッター式レンズ交換機のアンビジレット(1956)である(写真16)。当時各社から発売されたブアマンズライカのひとつで発売されたレンズは4種あった。三本の交換レンズに対応する視野枠を内蔵しており、上部カバーのスライドノブを左右すると視野枠が変化する。アンビジレットは三機種発売され、最終型は1957年のデラックスモデルである。

1958年からは35mm高級機はレンズシャッターSLR、アンビフレックスに路線変更されている。

(紙数の制限で割愛した記述もあり、万全でないことをお断りしておきたいー 著者)



写真16 アンビ ジレット Ambi Silette